



[特集] ウクライナ情勢とJVC

JVCは活動地でない場所に
どう「関わる」か

[特集] ODA軍事化を考える

政府開発援助 (ODA) は
「外交・安全保障のツール」
ではない

[特集] カレンダー総括・紹介

国際協力カレンダー事業は
今年度で終了します

カレンダー事業を90年代に担当したOG岩崎美佐子さんと、現担当の仁茂田。最後のカレンダーを手に記念写真を撮りました

JVCは活動地でない場所に どう「関わる」か

ロシアのウクライナ侵攻を機に、JVCでは「現地のため何かできるのか」「どう関わるのか」との話し合いや学習会を続けた。そしてさまざまな視点を得る。「悪」＝ロシアを「善」＝西側諸国が軍事力で叩くという「わかりやすい」構図は犠牲になる人びとを看過してしまうこと。日本も有事に備え、特に沖縄で軍事態勢強化に入ったこと。私たちがするべきは軍拡にNOと声を上げることだ。日韓の市民・研究者が国連に宛てた、ウクライナ戦争の停戦仲介を求める書簡にもJVCは賛同した。JVCは今後も、この問題での学びや意見交換を続けていく。



ウクライナ侵攻から見えてくる
世界の、そして日本の軍事化も考えよう
広報／フアンドレイジンググローバル・フマナーシャリー 並木 麻衣

「何ができるのか」—— 繰り返された職員の 自問自答

2022年2月24日、ロシアのウクライナ侵攻の第一報にJVC職員が気付いたのは、ちょうど昼休みの時間。私も、在宅ワークの合間にテレビで流れる現地からの生中継を固唾を呑んで見守っていました。

「戦争が起きた」こと自体へのショックももちろんですが、世界の首脳たちが「外交で防げたはずの争いを、また、止めることができなかった」こと、この政治の失敗で失われるものを取り戻すのに途方もない努力と時間がかかることに思いを巡らせ、やるせない気持ちに襲われた職員もいたと思います。

JVC事務所には「JVCは何をするのか」「ウクライナを支援しないのか」というお問い合わせや、「JVCの考え方を聞きたい」「自分の考えを聞いてほしい」とのお電話が相次ぎました。JVC

Cが過去にコンボ紛争で現地支援をしたことを想起した方もいるかもしれませ

ん。
「それぞれに深刻な問題を抱える現行の活動地を守らなければならないJVCが、この事案にどう関わるべきなのか」とスタッフも悩む日が続きました。お昼休みや全スタッフが参加する会議でも、JVCができることを話し合いました。

職員の視点を拾い集める

3月8日の会議では、職員から数々の視点が出されました。

日本が「武力による問題解決」でウクライナと関わることへの懸念。世界を敵と味方に分ける「分かりやすい」視点ではなく、市民と市民、命と命という関係性から語る発信の必要性。日本も決して無関係の話ではない、などなど。

これら視点を整理した形で、3月14日、今井代表理事がJVCホームページ



前JVC代表理事で、現在は沖縄県名護市に住む山博史氏(右上)は、ウクライナ侵攻を機に日本政府が台湾有事を想定し、実際に沖縄では自衛隊による軍事施設が強化されていることを勉強会で伝えた

で「いま、世界の分断を止める時」とのメッセージ(注1)を发出了しました。その要約を紹介します。

「ロシアの軍事侵攻は許されない。だが、NATO(北大西洋条約機構)の東方拡大の停止をロシアが求めているのに、14年以降、米国はウクライナに軍事支援し、NATO諸国も携帯型ミサイル供与などでロシアを追い込んでいた。

侵攻後も『悪』のロシアを叩く欧米が『善』であるとの構図の中で、紛争当事国に軍事支援してこなかったスウェーデンやフィンランドも武器供与を始め、日本も『防衛装備移転三原則』の運用指針を変えてまで防弾チョッキなど防衛装備品を送る決定をした。日本ではウクライナ危機に乗り、『日本も有事に備えた防衛力』との声が上がっている。事実、沖縄・南西諸島ではミサイル配備が進み、『敵基地攻撃論』のもと、自衛隊により攻撃的な装備がなされている。私たち自身の問題としても考えなくてはならない」

その後の話し合いでも、困っている人があるのは事実だから、まずは人を送ってみては、という意見や他団体職員と非公開での意見交換を求める意見などがあ

りました。その中で、「一刻も早く争いを止める

ためロシアとウクライナの対話環境を作ろうとする一部の国々の動きが、国連会議の場ですら採決されなかった」という声については、「炎上」を漠然と恐れて萎縮するのではなく、紛争の現場を見てきたJVCとして、JVCラジオ(注2)でも職員自身の声で発信をしました。

会員の皆さまと考える

6月18日。第23回会員総会の後に、「ウクライナ情勢を受けて、JVCらしいアクションとは」というテーマで意見を交換し合う「会員のつどい」を実施しました。4、5人のグループを6つほどつくり、情勢に対し抱えているモヤモヤを共有し合ったのです。

実況中継のようなニュースを見て深めた平和への想い、日本、そして世界で進む軍拡にNOと声を上げ、ロシアで実施しているような対話の枠組み創出をJVCに期待する声、とさまざまな意見が出る中、今井代表理事に対しては「喧嘩両成敗ではなく、ロシアの侵略は明確に否定してほしい」とのメッセージもいただきました。

同メッセージには、発直後から数名の会員から賛否のメッセージをメールやお手紙でいただきました。その一つ一つ

◎注2…JVC Radio #2「ウクライナ情勢、南北ロシア事業担当から見て感じるモヤモヤ」(2022/3/22) <https://www.youtube.com/watch?v=8VSm1Fw96PQ>、JVC Radio #4「南アフリカからパレスチナ・ウクライナ情勢を見る ～国連をキーワードに～」(2022/04/05) <https://www.youtube.com/watch?v=V58-ehb32o8>



ほぼ音声でお届け!

JVC RADIO

#5
ウクライナ情勢、日本から
防衛装備品を送っていいの?
2022.04.11



JVCラジオに登壇した「武器取引反対ネットワーク(NAJAT)」の杉原浩司さん。日本政府がウクライナに行っている軍事物資支援の問題点や効力、市民社会の重要性などを話していた。

に代表理事自身が返事を返しています。私たちが自身も手探りの中、会員の皆さまからのお言葉はいつも、今後を考えるための手がかりの一つになっています。

日本との 関係性を考える

日本はウクライナ政府に対し、防弾

チョッキ、ヘルメット等の支援を行っています。これについて、JVCラジオ(注3)では「武器取引反対ネットワーク(NAJAT)」の杉原浩司さんをゲストに迎え、防衛装備品の支援の問題点、敵基地攻撃の抑止力が機能しないこと、軍備増強に傾く世界の中で「待った」をかける市民社会の重要性などを話していました。

大切な問題提起をいただき、横で聞いていた職員たちからは思わず拍手が上がっていました。

ウクライナ情勢は日本の軍事化と明確なつながりを持ちつつある、という事実もあります。防衛費倍増、敵基地攻撃能力、核の共有、といった大きな動きが、ウクライナ侵攻後に日本でも起きつつあります。大切なことが市民の議論を挟まずノーチェックで決まる現状に対し、沖縄在住の谷山博史JVC顧問を招

いた内部勉強会「ウクライナ情勢と日本の軍事化を考える」も7月に開催しました。「ともに考え行動していただきたい」と私たちが考える他団体にもお声がけし、一緒に参加していただきました。勉強会では、ウクライナ情勢が米国の外交政策と連動し、結果として日本で、特に沖縄の人々の暮らしに悪影響をもたらそうとする現状を扱いました。

★ウクライナ戦争で出来上がったロシア包囲網が結果として米国を利すること。
★米国の対中戦略へ世界が協力する布石になること。

★米国の「台湾有事」キャンペーンは、アフガニスタン撤退とほぼ時を同じくして、米国による中国批判演説をきっかけに始まったこと。
★このキャンペーンに日本政府が便乗して作成された、中国と台湾の戦闘発生を想定した「日米共同作戦計画」原案では、住民が暮らす沖縄周辺の島々が米軍や自衛隊の攻撃拠点となることなど、米国の政策にさらに巻き込まれ、紛争に関わろうとしていく日本の現状が浮き彫りになりました。

「この状況に何をすべきか?」という参加者の声には、「選挙でも勝てない現状

を考えると、人と人との対話が必要です。重要では」との谷山顧問のコメントがありました。参加された他団体の方が「とても重い宿題を得たが、とにかく話していきたい、もっと理解したい」とおっしゃっていたのが印象的でした。

この情勢は「ロシアによるウクライナ侵攻」だけでは済まず、日本の私たちや東アジアの市民、世界の人人々にも大きな影響を及ぼすであろう状況を、浮き彫りにしているような気がします。まさか、と思う紛争が起こってしまった現代だからこそ、飛び火していく皆さんの問題の火消し、更なる惨禍を生みかねない政策への反対など、多様な動きを生み出す視点が必要と感じます。

小さな団体の小さな試みかもしれませんが、JVCでも引き続き、学びや意見交換の場の設定や発信を続けていきたいと願っています。会員、支援者の皆さまのご意見をいつでもお待ちしております。お電話やお手紙、FAX、メールでぜひお寄せください。



JVC代表理事 今井 高樹

どうして「即時停戦」なのか

即時停戦を批判する声

7月7日、日韓の市民・研究者が国連事務総長宛てに、ウクライナ戦争の停戦に向けた仲介を要請する公開書簡（注1）を提出しました。JVCも賛同しました。

これは、和田春樹さん（東京大学名誉教授）など日本の歴史研究者が中心になった取り組みで、3月に最初の声明、5月には韓国の研究者との連名で第2次の声明が発表され、さらに戦争の長期化を受けて今回の書簡が作成されました。一貫して即時停戦を訴えています。

この即時停戦の訴えに対しては、賛同と同時に批判の声も多く出ています。ネット上では「ウクライナに『降伏しろ』というのか」「停戦はロシアの侵略行為を認めてしまうことになる」といった書き込みが少なくありません。

決着がつくまでの看過よりも、まず止めよう

7月21日の「月刊JVC」では、この書簡の取りまとめ役である岡本厚さん（雑誌「世界」元編集長）に、その点も含めてお話を伺いました。なお、岡本さんは1990年代には今の理事にあたる「執行委員」を務めるなど、JVCを創設期から支えてくださった方でもありません。

「侵略したロシアを打ち負かすという正義の実現を第1に考えるのは理解できるが」としつつも「殴り合いのケンカを見かけたなら、どちらが正しいかを論ずるより先に間に入って止めるはず」と、たとえ話をされた岡本さん。まずは停戦、しかし停戦とは講和ではなく、国連のもとで停戦監視団を派遣し、そこから領土問題等の解決など講和に向けた「話し合い」を始めるのが即時停戦の考え方だと説明をされました。

沖縄の問題に長く関わった経験から「命こそ宝」という言葉こそが、沖縄戦の教訓であり、日本の平和運動の原点ではないか」と話されていたのが印象的でした。当時の日本が掲げた「正義」のために最後まで戦わされた結果があつた膨大な犠牲でした。

「悪」であるロシアを倒すという「正義」を実現するためウクライナに大量の武器が送られ、さらに多くの人が犠牲になっていく。「決着」がつくまで人々は戦わされるのか・それを看過できないという立場が、この即時停戦の訴えです。

守るべきは「国」ではなく人びとの「命」

岡本さんに話を伺ったあと、「国家」とは何なのかを改めて考えさせられました。

第2次大戦中の日本でも、今のウクライナでも、あるいはロシアでも、人々は「国を守る」ために戦争に動員されます。しかし「国」とはいったい何なのでしょう。うか？いくつかの地域紛争を現場で見ても、紛争当事者のリーダーたちは常に、これは国全体の、あるいは民族全体のための戦争だとうそぶきます。しかしその実態は、特定の集団の利益と結びついた国家体制や政治権力を守るための戦争であり、人々は常に犠牲になり、置き去りになるだけです。守るべきは、ウクライナやロシアといった「国」ではなく、人々の命ではないか。それが即時停戦の意味だと私は思っています。



政府開発援助（ODA）は「外交・安全保障のツール」ではない

貧困削減や社会開発の支援であるはずのODAが今、軍事支援への傾斜を加速させている。昨年10月には、初めて自衛隊装備の供与が実施された。日本企業による初の完成品武器輸出も決まっている。さらに今年、ウクライナ侵攻を機に、日本政府は中国の覇権的台頭を意識し、「より戦略的な国際貢献の展開」を実現するための改定を検討している。ODAは中国封じ込めのための外交ツールではないはずだ。



JVC代表理事
今井 高樹

軍事支援ではないのか

「これは大変なことになる」

5月16日、開発協力大綱の改定を報じる記事（注1）を見た瞬間、そう思いま

した。開発協力大綱とは、政府開発援助（ODA）の基本方針を定めた文書。記事は、政府が「ロシアのウクライナ侵攻や中国

の覇権的台頭、新型コロナウイルスの世界的流行などで国際情勢が激変する中、より戦略的に国際貢献を展開する必要があると判断」して改定を検討していることを伝えていました。

日本のODAは、これまで軍事関連の援助への傾斜を強めてきました。このタイミングでの改定は、間違いなくその流れが加速することになります。記事の中でも、年内に見直される「防衛3文書」注

2）と並行した動きであることが示唆されています。

「非軍事」目的という名の下で

多くの人は、ODAといえば、途上国の社会インフラ整備や人材育成というイメージをお持ちではないでしょうか。ダムなどの巨大開発事業が現地の住民に負の影響をもたらしたケースも多くありましたが、それでも、ODAとは貧困削減や社会開発のための支援だというのが共通認識でした。国際的にも「開発途上国の経済開発や福祉の向上に寄与することを主たる目的としている」（注3）と定義付けされています。

ODAの流れが大きく変わったのは、15年に行われた前回の開発協力大綱の改定でした。この改定では「軍事的用途及び国際紛争助長への使用を回避」という原則を維持する一方で、「非軍事」目的であれば支援の対象に相手国の軍や軍関係者を含むことが解禁されたのです。これ以降、軍や軍関係者を対象に含むODAが堂々と行われるようになっていきます。

たとえば海図作成の研修や防災機材の供与が「非軍事」として行われてきましたが、作成した海図は「軍事」にも役立つ

つでしようし、防災に使うブルドーザーは軍事基地の建設にも使うことができるでしょう。

また、中国の海洋進出に対抗するかのように、ベトナム、フィリピン、インドネシアには、ODAで何隻もの巡視船が供与されています。これらの船艇の供与先は軍とは別の沿岸警備隊という組織であり、だから軍事支援ではないと外務省は主張してきました。しかし沿岸警備隊は武器を兼ね備えた準軍事組織であり、軍と密接に連携して海上警備にあたるのが一般的です。軍事ではないと断言する



フィリピンに自衛隊機材がODAで供与され、自衛隊が使用方法を訓練した（在フィリピン日本大使館ホームページより）

注1…産経新聞ウェブ版2022年5月16日<独自>開発協力大綱改定へ 国際秩序激変、対外支援戦略見直し
https://www.sankei.com/article/20220516-QLZQGVTPWFH7AFA2DU4DP15ZY/
注2…国家安全保障戦略、防衛計画の大綱、中期防衛力整備計画

【柱2】我が国と我が国の安全を守るべく「力強さ」のある外交を推進する

(1) 安保・経済両面での国際秩序の強化、我が国が主導する新たなルール作り
ポスト・コロナの国際秩序の構築を踏まえ、同盟国・同志国との協力を強化する。

○二国間(無償資金協力・技術協力(JICA))を通じた支援

- ▶ 「自由で開かれたインド太平洋」の実現
 - ・海上保安能力強化支援
 - ・法制度整備支援
 - ・連結性の強化のための「質の高いインフラ」整備を通じた支援等
- ▶ 経済外交の強化
 - ・中小・中堅企業も含めた日本企業の海外展開支援
 - ・産業育成・雇用対策に資する産業人材育成支援等

過去の支援例



沿岸警備隊の能力向上支援(フィリピン)



メコン川に架かる橋梁(カンボジア)



日本企業と連携した持続的な木材利用の指導(タンザニア)

(2) 危機的状況下でも機能する外交・領事実施体制の構築
いかなる危機下でも外交・領事業務を遂行するための体制を構築する。

- ▶ JICAにおける業務継続性の確保、海外での安全確保等

P5

21年3月ODA政策協議会での配布資料「令和3年度外務省予算政府案の概要(国際協力関連部分)」より(5ページ目)

A予算の資料に驚かされました。そこには、国際協力予算の「柱」のひとつとして「我が国と我が国の安全を守るべく『力強さ』のある外交を推進する」とあったからです。

「力強さ」のある外交とは、いったいどういうものなのか？ 同じページにはフィリピン沿岸警備隊の写真が掲載され「同盟国・同志国との協力」の文字が目に入りました。「力強さ」とは「軍事的な同盟関係づくり」と思ってしまった私は短絡的すぎるでしょうか。「開発協力」であるはずのODAはいつの間にか、「我が国と我が国の安全を守るため」つまり国家安全保障の一環としてのODAにとって換わられようとしていました。

相手国に供与する初のODAが実施されました。相手はフィリピン国軍。供与されたのは人命救助用資機材です。自衛隊がフィリピン国軍に機材の使い方を訓練する「能力構築支援」がセットになって実施されました。

このODA案件は、供与先が国軍の災害救助部隊であることから「非軍事」とされていますが、防衛省の側ではこうした「能力構築支援」を防衛協力の重要な施策と位置づけています。「非軍事」の他国軍支援というグレーゾーンが、実質的には軍事協力の枠組みにどんどん取り込まれているのです。

他方で、フィリピンへは日本企業による初の完成品武器輸出となる防空レーダーの移転も決まっており、武器輸出、ODAによる装備品供与、自衛隊の「能力構築支援」がセットになる形で急速に日本との軍事協力が進められています。

中国封じ込めのための外交ツールではない

この原稿を書き終えようとしている9月9日、外務省が開発協力大綱の改定を発表しました。有識者懇談会での議論を経て、23年前半に策定するとされています。

報道発表では、改定の方向性として

のには違和感があります。

国際協力における「力強さ」とは何か

21年3月のODA政策協議会(注4)に出席した私は、外務省が説明したOD

自衛隊装備を供与する初のODA

ODAを活用した他国軍との連携強化は、私たちの想像以上に進んでいるかも知れません。昨年10月、自衛隊の装備を

「自由で開かれたインド太平洋」の理念の具現化」が強調され、「外交の最も重要なツールの一つであるODAの更なる活用を図る」となっています。はたして、ODAは「外交のツール」なのでしょうか？

これまでの開発協力大綱では、ODAとは国際協調主義に基づき、非軍事的手段において社会開発を行うものでした。決して、「自由で開かれたインド太平洋」という中国封じ込めを意識した軍事・経済面での国家戦略を実現するための外交ツールではないはずですが。

引き続き注視し、問題提起を行っていきます。



JVCはこれまで、安保法制など日本の軍事化への動きに国際協力NGOの立場から反対の声を挙げてきた。写真は2019年の安保法制違憲訴訟(横浜地裁)の報告会で話す原告側証人の今井。

◎注3…経済協力開発機構(OECD)下の開発援助委員会(DAC)による定義。JICAウェブサイトより <https://www.jica.go.jp/aboutoda/jica/index.html> ◎注4…ODA政策協議会は、NGOと外務省との定期協議のひとつとして、ODA政策について両者が意見交換を行う会合。今井はそのコーディネーターを務める

国際協力カレンダー事業は今年度で終了します

1986年から、ほぼ毎年、第一線で活躍する写真家たちが世界各地で撮影した写真を題材に制作したJVCカレンダーは、今年度で終了となる。高い質を維持してきたことで固定購買層がいる一方、新規層の開拓が難しく収益が落ち、本来の目的である収益を活動資金に活かすことが難しくなったためだ。今後はカレンダーを通して国際支援をしてくれた人びととのつながりを活かし、違う形での支援を考えていきたい。



JVCカレンダー事務局
仁茂田 芳枝

た絵はがき（現在のポストカード）、2007年度に卓上カレンダーが発売開始となりました。

カレンダー制作は
2022年度で終了

2009年度には従来のカレンダー写真を使ったものではなく、JVCの活動地の子どもたちが描いた干支のイラストをつかったスマイル年賀状が加わりました。現在も壁掛け・卓上カレンダー、ポストカード、スマイル年賀状の商品ラインナップで制作・販売を続けています。カレンダーは、写真家の選定、タイトルと写真の決定、デザインまで、毎年数ヶ月かけてスタッフ・写真家・デザイナー・印刷会社も含めたチームで、よりよいものをお届けしたいとあれこれ試行錯誤を重ねて制作しています。その過程では、ご購入してくださった方の声もおおいに参考にさせていただいています。

JVC国際協力カレンダーの魅力は何といっても世界各地の魅力的な写真たち。本当に素晴らしい写真家の方々にご協力いただき（別表参照）、写真に惹かれて買ったのがきっかけでJVCを知ったという方も多く、JVCを知る、もしくはJVCに寄付をするきっかけとしての役割を担っていた時期もありました。しかし、90年代以降はカレンダー自体の市場規模も縮小傾向となり、2000年代以降はカレンダーを通して新規層への広がりを持つこともなかなかできませんでした。

会員の声も反映してきた JVCカレンダー

JVC国際協力カレンダーは、1986年にUNHCR（国連難民高等弁務官事務所）・ユニセフと共同でアフリカ飢餓救済キャンペーンで制作したチャリティカレンダーがきっかけとなって始まりました。

カレンダーが好評だったということか

ら、翌々年からJVC独自のカレンダーの制作・販売をスタート。当初は「JVCチャリティカレンダー」という名称でした。以来、毎年第一線で活躍する写真家の方に世界各地で撮影した作品を提供していただき、毎年ごとにタイトルを冠して制作・販売するというスタイルで続けてきました。

当初は壁掛けカレンダーのみでしたが、90年度にカレンダーの写真を使っ

一度、暦の部分から、これまで掲載していた月の満ち欠けをはずしたときには多くの方からの「はずさないで！」という声が多く寄せられ、次回からすぐに戻した、といったこともありました。

写真の方向性・写真家についてのご希望や暦部分のデザイン、裏表紙などの掲載内容などについてのさまざまな意見を反映しながら、皆さまと一緒に取り組んできたカレンダーだと思っています。

それでも毎年応援してくださる方たちのおかげでこれまで続けてこられました。近年はカレンダーの収益を活動資金に、という本来の目的を果たすことが難しくなり、今後も継続するかを考えねばならない状態となってしまいました。

一時は1500万円近くの収益があがるときもありましたが、21年度は売上こそ約1800万円、JVCの収入全体の7割を占める金額となっていますが、費用を引いた収益は約50万円と赤字ギリギリ。販売部数も、94年には2万5000部近い売上を記録していましたが、減少

JVCのカレンダー一覽

発行年	タイトル	制作・写真家
1987		UNICEF・UNHCR共同制作
1989	『アジアから!』	森枝 卓士
1990	『アジアから一人間-』	管 洋志
1991	『アジアから風景-』	管 洋志(2)
1992	『アジアから豊穡-』	管 洋志(3)
1993	『アフリカ』	野町 和嘉
1994	『アフリカ#2』	野町 和嘉(2)
1995	『アフリカ#3』	野町 和嘉(3)
1996	『アジア』	管 洋志(4)
1997	『アジア』	市原 基
1998	『アジア・メコン』	マイケル・ヤマシタ
1999	『アフリカ#4』	野町 和嘉(4)
2000	『Dear Children』	管(5)・野町(5)・長倉 洋海
2001	『市場彩影』	管(6)・野町(6)・森枝(2)
2002	『いっしょに生きる』	管 洋志(7)
2003	『大地』	野町 和嘉(7)
2004	『子どもたちのアフガニスタン』	長倉 洋海(2)
2005	『いのり』	野町 和嘉(8)
2006	『モンズーンアジア』	市原 基(2)
2007	『アジア育ち』	管 洋志(8)
2008	『子ども日記@地球』	小松 義男
2009	『風のささやき』	白川 由紀
2010	『子どもたちの大地』	長倉 洋海(3)
2011	『アジアの瞳』	三井 昌志
2012	『いのちの輝き』	松尾 純
2013	『大地にうたう』	長倉 洋海(4)
2014	『心のお陽さま』	安田 菜津紀
2015	『この星の旅人たち』	竹沢 うるま
2016	『いのちいっぱい』	竹沢 うるま(2)+谷川 俊太郎
2017	『輝く瞳』	田沼 武能
2018	『Have a nice day!』	長倉 洋海(5)
2019	『この空の下で』	野町 和嘉(9)
2020	『Tumu Te Varovar』	竹沢 うるま(3)
2021	『私は、おもう。』	堀 潤
2022	『セカイのたからもの』	三井 昌志(2)
2023	『つなげよう笑顔のバトン!!』	三井 昌志(3)

傾向を止められず、昨年度は壁掛け・卓上の販売部数が約1万1000部となっています。

この状況を打破するべく、スマホに対応した特設サイト・クレジットカード決済の導入や生協・企業・団体など大口への新規営業などさまざまな施策も試みてきましたが、減少に歯止めをかけることができず、団体内での議論の末、22年度をもってカレンダー・ポストカード・年賀状の制作・販売を終了する、という結論に至りました。

「毎年楽しみで、これまでのカレンダーはほぼ全て大切に保管しています」と

「世界について知ることができて楽しい」といったありがたいお声もたくさんいただいております。カレンダー終了についてはスタッフも本当に残念でなりません。

つなぐりは途切れさせない

最後となるJVC国際協力カレンダー2023のタイトルは「つなげよう笑顔のバトン!!」今日も、あしたも、あなたとともに。

カレンダーを使う人々と世界各地の人々をつなぐ架け橋となり、お互いが笑

顔になれるように、という思いが込められています。前回に続き写真家・三井昌志さんによる世界各地の人々の心あたたまる笑顔の写真がいっぱいのカレンダーです。ご好評のうちにその歴史を終えられるよう完売御礼を目指しています。ぜひご購入や周りの方への拡散で最後のカレンダーを応援していただけたいと思います。

厳しい状況を変えられずこのような決断となりましたが、カレンダーを通してのご支援があったからこそ守ることができた暮らしや命が数多くあったし、一年を通してじっくりとつきあうカレンダー

という性質もあり、応援してくださる皆さまとも、長い時間をかけて特別なつながりを築いてこられたと思っています。

カレンダー事業は終了となりますが、応援してくださる方たちとのこのつながりを途切れさせずにいたい、と切に願っています。これまでカレンダーを通してつながってきた方たちにも、エコで気軽にできるモノでの支援など、別の形でJVCと、そして世界各地の人々とのつながり続けていただければ幸いです。

長年のあたたかな応援に、心から感謝しています。本当にありがとうございました。



JVC独自制作のカレンダー第1号を紹介するT&Eの記事(1988年9月発行T&E83号)。当初は「JVCチャリティカレンダー」という名前でした。JVCカレンダーはここから始まり、30年以上も皆さまの応援で毎年続いてきました

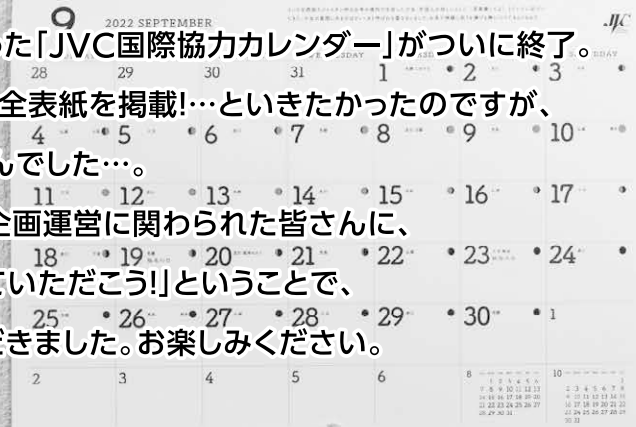
歴代担当スタッフ・ボラが選んだ!

思い出のカレンダー

JVCの長寿プロジェクトとなった「JVC国際協力カレンダー」がついに終了。

せっかくなので、今回の特集で全表紙を掲載!…といきたかったのですが、誌面が限られていて叶いませんでした…。

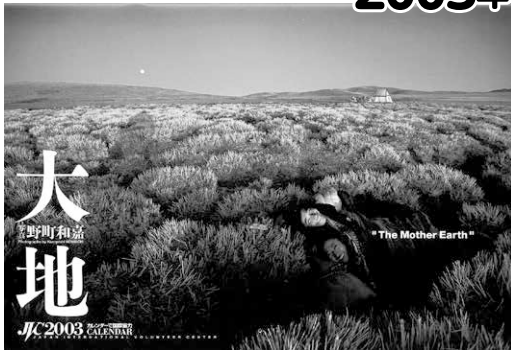
「それならせめて、カレンダー企画運営に関わられた皆さんに、心に残るカレンダーを紹介していただく!」ということで、一部の方々にコメントをいただきました。お楽しみください。



皆さまにも、カレンダーの思い出はありますか?

ぜひ、カレンダー事務局までお知らせください! スタッフ一同、楽しみにしています。
お送り先はJVC事務所か、メールはこちら。calendar@ngo-jvc.net (広報担当 並木麻衣)

2003年



大地 野町 和嘉

写真家野町氏。メッカ巡礼、アフリカの大地など、その素晴らしさは広大な風景を一枚の写真に納めてしまう点にあります。JVCカレンダーでは初期の頃から協力してもらっていましたが、最も魅力ある大地の写真はそれまで使われていませんでした。折しも制作はアメリカ同時多発テロ直後。動揺する世の中に向けて「大地」を送り出すことができました。

1999年カレンダー担当インターン、
2000年～2003年カレンダー担当
平岡(川合) 千穂

1995年



アフリカ#3 野町 和嘉

販路を広げようと、書店や生協、アジアアフリカ雑貨店などに営業したり、イベントがあれば出店したりと奮闘の毎日。新聞記事に掲載されると、ルワンダ危機の影響もあり注文の電話が殺到。2万7千部を売り上げました。山のような発送作業は大変でしたが、ボランティアの皆さんに助けられました! 今でも連絡をとっている方がいます。人脈も経験も私の財産になりました。

1994～1996年
カレンダー事務局・物品販売担当
望月 聡子

1990年



アジアから 一人間一人
管 洋志

最初の年はアジアを歩いていた友人の森枝卓士さんと決めていました。ただ野町さん以外の誰かも…と考えていたときに、JVCスタッフの小西勇さんが管洋志さんの写真展の新聞記事を見せてくれ、一緒に行って即座に決めました。以後、長いおつき合ひでしたが、2013年に亡くなられてしまいました。

岩崎 美佐子

ある日、本屋で見つけた三井さんの写真集。ここからカレンダー担当が写真家さんも含めて制作するようになりました。同じころ卓上カレンダーもスタート。山のような申し込みはがき。電話、FAX。毎日5人、10人のボランティアさんが(毎日出勤の方も)発送作業してくれて、秋の事務所はさながら作業場のよう。感謝、の一言です。

2004~2012年
収益事業カレンダー担当 荻野 洋子

ニュースの中の国を「いつか行きたい国」に変えてくれる。それがJVCのカレンダーでした。担当者として関わった「子どもたちのアフガニスタン」。緑広がる美しい自然、そして日常の穏やかな風景に、アフガニスタンのイメージが180度変わりました。写真の子たちはすっかり大人になっているはず。変わらぬ笑顔で元気になっていますように。

2003年 カレンダー担当
高橋(広瀬) 哲子

2004年



子どもたちのアフガニスタン
長倉 洋海

この年のカレンダー販売は好調で12月の中頃には在庫が無くなり、追加納品は年明けになってしまいました。受注残は1500部ほどあり、1日でも早くお届けするため、正月休み明けにJVCスタッフ総出で発送作業。発送に不慣れスタッフにミスが出ないよう、年末までに注文種類ごとに分類し、簡単なものから分類毎に封入するものを説明し、1日で終了。幸いなことに発送ミスはありませんでした。

2001~2011年カレンダー発送 ボランティア 桜小路 光紀

2011年



アジアの瞳 三井 昌志

2020年



Tumu Te Varovaro
~幸せの音が響く島~
竹沢 うるま

2019年



この空の下で
~Sky doesn't know borders~
野町 和嘉

2021年



#私は、おもう。
堀 潤

ごめんなさい。それぞれに思いがあって1つに絞れません。2019年のテーマは多様性。多様な文化や宗教をお互いが認め合い一緒に笑い合える社会でありたい。2020年のテーマは幸せ。世界で最も幸せというクック諸島の人々から幸せのおすそ分け。2021年のテーマは分断。コロナ禍で進んだ人と人との分断。お互いにおもいあっている人々の「おもい」を「私は、おもう。」というタイトルに込めました。

2017~2021年
収益事業担当 伊藤 圭

2014年



心のお陽さま 安田 菜津紀

最初の出会いは、彼女が通っていた大学のキャンパス。いつもカメラを首から下げながら大学構内を歩いていて、カンボジアに興味を持っている学生がいたら、その大学で教員をしていた友人から紹介されました。当時、私はカンボジア事業担当、カレンダーに使う写真の選定に絡んでいなかったにも関わらず、「JVCカレンダーに写真提供して」なんて、無責任に声をかけてしまったのが彼女を推薦した理由のひとつ。今だから話せる裏話です。

2012~2014年
カレンダー担当 島村 昌浩

JVC応援団をご紹介します

「絵本のある子育て」が広げる、私と子どもの感性と世界。

JVCは、たくさんの個人・団体・企業の皆さまに支えられて活動を続けています。そんな皆さまのことも、私たちからストーリーも交えてご紹介したい! という思いから、新コーナーができました。題して「JVC応援団をご紹介します」。

第1弾は、長い間、JVCの活動を支え続けてくださっている株式会社童話館さんです。(書き手: 広報担当 並木)

株式会社 童話館

長崎県長崎市



1981年、絵本や子どもの本を専門に扱う本屋として、長崎にて創業。2001年に「子どもの平和と生存のための童話館基金」を設立し、JVCのカンボジア事業をはじめとした国際協力活動を支援。絵本の定期便「童話館ぶつくらぶ」が、世界の子どもたちへのあたたかな支えとなっている。



7月に我が家に届いた新しい絵本。3匹の動物たちの活躍が描かれます

株式会社童話館さんは、長崎にある子どもの本専門店です。国内外の親子に本を毎月届ける「童話館ぶつくらぶ」というサービスを運営されています。

このサービスは、成長に合わせた選りすぐりの本が、子どもの名前宛で自宅に届く仕組み。小児科や子育て支援センターなどで、「絵本のある子育て」という紹介の小冊子を手にとられている方もいらっしゃるかもしれません。私も近所の歯医者さんで冊子を見つけて会員になり、今年8歳になる私の子どもが、「私の本が来た!」と毎月の配本を楽しみにしています。

といいつつも、実は親の私の方が楽しみにしているかもしれません。ぶつくらぶは「サービス」というより、有名どころの絵本、インターネット上のアルゴリズムでおすすめされる流行りの作品とは一線を画す「知らなかつた名作」が、子どもたちの成長への願いを込めて我が家に贈られてくるイメージ。スリランカの民話、世界の童話集、子どもが家を出をしちゃう話、家事や仕事の話、動物たちの個性や命の話……とテーマや絵のバリエーションが豊かで、読み聞かせをする私自身にとって、貴重な出会いになっています。

そして絵本に添えられる「童話館ぶつくらぶ通信」が、子育てをする私にとって、あたたかいコミュニティの一つでもあります。編集企画

室の方々がつづるお手紙のような通信文に毎号考えさせられ、同じ絵本を受け取った世界中の父母から届く感想、子どもの反応のお便りに、「うちもそつ!」「そういう考え方もあるのかあ」とうなずきます。

先日、そのあたたかさを殊更に実感する出来事がありました。「配本にJVCが集める不要品の封筒を入れてさせていただけませんか」とお願いしたところ、スタッフの皆さんがご快諾くださり、同封が実現。受け取った「童話館ぶつくらぶ」会員の方々から、支援の詰まった封筒が次々と届いたので。

JVCスタッフもびつくりしたのは、添えられたメッセージの多さ。「少しでもお役に立てますように」「生まれた命が守られる世界になりますように」「海外も国内も同じ。困った方々の一助になれば」「また送ってください、できることを続けたいです」などなど、世界の人々への共感・想像力、できることへの意志にあふれた言葉がたくさん

ん並んでいました。3カ月間でJVCに届いた封筒の数は2200件を超え、中に入っていた使用済み切手やハガキなどを換金した結果、462万円分もの支援が生まれしました。「家が近いのでJVC事務所へお手伝いに行きたいです」と連絡をくださったAさんは、すでにボランティアの常連に。仕分けを手伝ってくださいました。

童話館さんは2001年に「子どもの平和と生存のための童話館基金」を立ち上げられ、「この世界で同じときを生きている、困難のなかにいる子どもたちにも心を寄せていたい」と、JVCをはじめ国内やアジアの子ども・女性支援を行う団体を支え続けています。スタッフや会員の皆さまの大切な思いをJVCに託していただけることが大変うれしく、また「より良い世界を一緒に目指してくださいさる方々が、こんなにいる!」と心強い気持ちでいっぱい。皆さま、引き続き一緒に頑張ってください!



我が家に届いた絵本の中で、特に子どもたちがお気に入りの本がこちら



皆さまから届いた封筒。毎日山のように届きました!

スタッフの ひとりごと



何気ないことがきっかけで・・・

スーダン・ラオス事業担当 後藤 美紀

イラスト かのの倫子

ひよんなことがきっかけで起きた、ハピネスの連鎖のお話をしたいと思います。いまをさかのぼること3年、新型コロナウイルスが流行し、外出に制限がかかったときのこと。毎週末、都内で友人とランチしていた時間が、母と、近所のお店でお茶をする時間になりました。すると母から「美紀とこうやって週末過ごす時間が増えて楽しい」と言われ、なんだかすぐたく、温かい気持ちになりました。最近母と近くにあるのに知らなかったお店を探して巡り、地元の良さを再認識。

そしてお家時間に観ていたアニメがきっかけで始めたキャンプ。友人を誘ったところ、数年来の仲であるのに相手もキャンプ好きなことが初めて判明。友人と焚火を囲みコーヒーを飲んでいと雰囲気のおかげもあり、これまではお互い話したことのない深い会話ができて、一層仲が深まりました。そしてキャンプにすっかりハマった私はソロキャンプに行きたくなり、方向音痴なのでこれまで断固避けてきた車の免許を取得。運転の練習を兼ね、母と祖母をドライブに連れていくと、「こ

んな良いところがあるなんて、美紀のおかげで初めて知った」と、会うたびに何回もお礼を言ってくれる祖母。

こんな感じで、何気ないことがきっかけで家族と過ごす時間の温かさを実感し、趣味が増え、友人との仲が深まり、避けてきた運転も楽しくなり休みが充実し、日常が小さなハピネスで溢れました。嫌なことって不思議と何回も連続して起こるけれど、幸せなことも連鎖するんだなあと、新たな発見を体験した最近でした。

((())) 緊急支援報告 | 南スーダン

南スーダンで、何が起きているのか

代表 今井 高樹

「どうして自分たちは繰り返し襲われ、殺されなくてはならないのか。私たちは生きてはいけないのか」。こう問いかける避難民の言葉に、返す言葉が見つかりませんでした。南スーダン、ユニティ州レール郡。私たちが訪問したその場所は、2013年以来、繰り返し武装グループによる襲撃を受けてきました。

南スーダンでの新しい活動の可能性を探るため、スーダン駐在員の橋口と私は4月に現地を訪れました。その直前に起きた大規模な村々への襲撃。8万人もが家や財産を失い、避難民となったのです。国連の倉庫

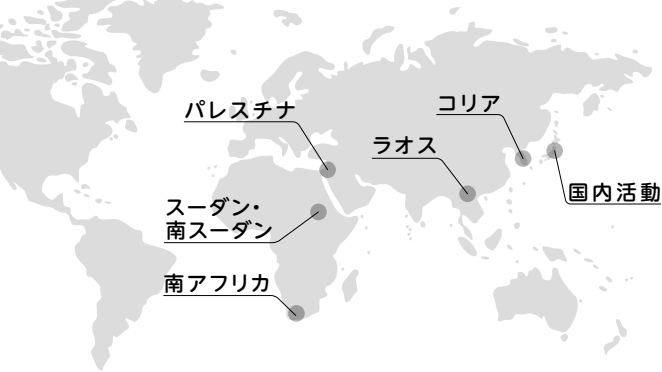
も襲撃を受け、支援はほとんど届きません。雨をしのぐ防水シートもなく木陰に寄り添う家族、何も口に入れることができず一日を過ごす子どもたちの姿を先々で目にしました。

出張後、「見過ごすわけにはいかない」と緊急支援の実施を決め、募金キャンペーンを始めました。現地で行動をともにした団体 Mobile Humanitarian Agency (MHA) との協力で、キャンペーンで集まった資金から防水シートを500世帯の避難民に届けることができました。



8月16日の配布。南スーダンの雨季は激しい雨も多く、防水シートが避難民家族を守る

繰り返される襲撃事件は、南スーダンの政治・軍事リーダーたちの権力争いが地方に持ち込まれた結果とも言えます。日本は自衛隊派遣の当時から南スーダン政府を強く支えてきた国ですが、今この国の現状が日本に伝えられることはほとんどありません。私たちJVCがもっと皆さんに伝えていかなければと思います。



プロジェクト一覧

3月後半～9月前半

スーダン・南スーダン

紛争による被災民の支援

(スーダン南コルドファン州カドグリ郡およびブラム郡)

●紛争による被災民の支援（南コルドファン州カドグリ郡）：過去2年間続けてきた補習校支援では、700名近い子どもたちが正規校へ編入することができましたが、依然としてカドグリには教育システムに組み込まれず学校に通えない子どもたちがたくさんいます。本年度もそうした境遇の約230人に食事の提供を含む補習校支援を6月から開始しています。

現在も反政府支配地域から流入してくる避難民の子どもたちが授業についていけるよう、彼らが習ったことのないアラビア語の読み書きなどを重点的にサポートしています。

教員へは効果的な教具・教材の使用方法などの研修も実施し、子どもたちが能動的に授業参加できるようになることを促しています。新学期は10月に開始予定のため、補習校を修了した後も正規校に編入・就学できるよう、調整を進めています。

●反政府支配地域での紛争による被災民の支援（南コルドファン州ブラム郡）：反政府支配地域では依然として活動する支援団体が限られており、特に教育は後回しにされがちです。空爆や砲撃によって10年近く破壊されたままになっていた、トロジ小学校の2



修復中の校舎の前に集まるトロジ小学校の生徒たち

教室の修復に取り掛かりました。通信状態が悪く調整に苦勞し、予定していたよりも時間がかかってしまいましたが、教員や生徒も部分的に協力してくれたことで、新学期開始直前に完成することができました。直射日光や雨で授業が遮られることなく勉強できる環境が整い、教員からも「このような支援は紛争以来初めてだ」という声が聞かれました。(後藤)

ラオス

住民主体の共有資源の管理と利用の支援



ラオス政府とのMoU調印式の様子

サワンナケート県での活動を終え、新しい活動地、南部セコン県でのプロジェクトを開始すべく6月に現地事務所の引っ越しを行い、7月に山室が現地代表に就任しました。

8月にはラオス政府とMoU（活動契約）の調印式を執り行い、共有資源管理のプロジェクトを正式に開始しました。活動村10村でプロジェクトについての共有と意見交換を行いました。また、本格的な活動開始に向け、人口などの一般情報、歴史、生産物、村境などの村の基礎情報収集および共有資源管理の仕組みの有無、利用方法についての調査を村人とともに実施していくための準備を進めました。(後藤)

調査研究・政策提言

外務省・JICAとの政策協議／各種提言



起業や省庁に対し、国軍と資金のつながりを断つこと求めて路上アクションを継続

●ビルマ/ミャンマー：2月1日でクーデターが発生してから1年が経過しました。日本の他団体と協力しながら、日本企業や省庁とミャンマー国軍との資金のつながりを断つことを求め、企業や省庁前でのアクション、企業・政府との面会・協議、イベント開催、声明発出などを継続しました。(渡辺)

●ナカラ回廊開発：3月、NGO・外務省／ODA政策協議会において、現地小農から反対の声があがり2020年7月に中止となった大規模農業開発ODA「プロサバンナ事業」の「検証」を進めるための議題提案を行いました。6月には、財務省・NGO定期協議会において、天然ガス開発事業に関する議題提案をしました。(渡辺)

●開発協力大綱：9月、ODAの基本方針を定めた「開発協力大綱」を来年前半に改定すると外務省が発表しました。懸念点はODAの国益化、軍事化など一層の戦略援助化です。改定に向け設置された有識者懇談会のNGO委員をサポートするアドバイザーグループに今井が参加しました。(今井)

南アフリカ

子どもケアセンターの 運営支援



自分たちの権利や責任ある行動に関するグループワークを行う青少年とそれをサポートするケアボランティア

親がいないなど厳しい家庭環境下に置かれた子ども(以下、OVC)に対し、リンポポ州の農村部(1村)で、OVCが通う「ムペゴ子どもケアセンター」との協働事業を行っています。センターは村の住民でもある「ケアボランティア(約8名)」が運営。約160名のOVCが通っています。

ケアボランティア8名が、センターで年齢に応じたOVCに提供する活動内容を充実させる方法を学ぶ「プログラム改善研修」と、センターに通う約11歳以上のOVC(青少年)約60名が、自分の権利や人生について学ぶ「リーダーシップ／ライフスキル研修」を開始しました。これに伴い、4月から、ケアボランティアとともに、毎週1回、青少年らが遊びを通じてさまざまなことを学ぶことができる活動プログラムを提供しています。この結果、学校を休みがちだった青少年が毎日通うようになるなど、行動変容も見られ始めています。

他の活動として、センターにおける菜園づくりと給食の提供、OVCらの家庭訪問などを通じた状況確認とケアサポートの提供を継続しています。(渡辺)

コリア

絵画交流「南北コリアと 日本のともだち展」/ 「東アジア大学生 ピースフォーラム」



オープンセミナーでは、大学生たちから次々とい質問が出て、安田さんも丁寧に答えてくれました

●「南北コリアと日本のともだち展」：20周年を経て、未来を担う子どもたちを絵やメッセージでつなぐという本来の形を継続しながら、これまでの20年で培った信頼関係を活かし、いつでもどこでも、どのような状況になっても多くの人々が絵を見ることが出来るオンライン絵画展「ともだち展ばらす」として新たに出発しました

●「東アジア大学生ピースフォーラム」：現在、ピョンヤンをはじめ海外の大学生との交流はコロナ禍により中断しています。対面での交流が再開したときに、隣国の学生たちとより意義のある交流ができるよう、「東アジア大学生ピースフォーラム」として生まれ変わりました。歴史や社会の問題について学びを深め、「東アジアの平和な未来をともに作りたい」と願う仲間を増やしていきます。

7月にはフォトジャーナリストの安田菜津紀さんをゲストにお招きしたオープンセミナーを開催し、8月11日には過去に訪朝した学生に当時の話を聞きながら「過去の清算」について参加者全員で考える第1回学習会を実施しました。

(宮西)

国内活動

日本国内での 活動資金調達/ 事務局運営など



今年のクラウドファンディングのイメージ画像。「学び」をテーマにご支援の呼びかけをしています

●カレンダー：2023年のカレンダーが9月1日に販売開始。数に限りがあるので、ぜひお早めにお求めください！

●ファンドレイジング：物品支援では、ラオス事業を長きにわたって支援されているアーシアン様が封筒配布に協力してくださり、約60万円ものご支援につながりました。また、全日本民医連様、佼成出版様、カタログハウス様も、ご厚意で出版物に物品支援広告を掲載くださいました。目標額3,100万に対し実績950万と少し伸び悩んでおり、引き続きご協力くださる方を募集しています。

夏募金が9月末で終了し、9月15日からはクラウドファンディングに挑戦中です(10月末で終了、目標500万円)。その後の冬募金キャンペーンに向けて、準備を進めています。1月ころに、古書などを集めるキャンペーンも企画中です。

●広報：連続講座をインターンが主体になって企画し、3回実施しました。今後、各活動地を扱う講座を予定しています。秋以降は対面でのイベント参加機会も増えています。また、ウェブサイトリニューアルを11月に行えるよう準備中です。

(並木)

パレスチナ

東エルサレムの女性と ガザの子どもたちへの支援



子どもの健診での体重測定の様子(ガザ)

●女性の生計向上とエンパワメント事業(東エルサレム)：本事業も2年目を迎え、女性たちの関心やニーズにより新たにグラフィックデザインやネイルなどの職業技術訓練を計画。5～6月には女性向け研修(前向き子育てなど)、7～8月には青少年向けの研修(コミュニケーションスキルなど)を実施。22回の研修に、延べ199名が参加しました。また、8月には青少年向けスタディツアーに39名が参加し、有機農業に取り組む農園で働く女性たちの生き方に触れました。

●子どもの栄養失調予防と改善支援(ガザ)：5月から、より支援が届きにくい3地域を活動地に加え、子どもの栄養失調予防と改善の活動を継続しています。3カ月で320名の子どもに健診を実施し、そのうち11名は治療が必要だったため、専門機関に紹介しました。今年度はコミュニティの母親たち同士の学び合いを促進する予定で、先ずリーダーとなる母親への研修を開始しています。今後、子育てについての知識が地域に広がっていくことが期待されます。

(木村(万)、大澤)

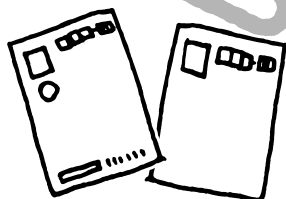
不用品を国際協力に生かしてください!

モノでの支援

タンスに眠っている
外国のお金などは
ありませんか?



外国のお金
(紙幣・コイン)



未使用の官製ハガキ
(書き損じもOK)



未使用のテレホンカード
商品券・ビール券

集めている物品



未使用・
使用済みの切手

JVC東京事務所には封筒や宅急便が日々続々と届いています。
中身は…日本中から集まる、書き損じハガキ、
使用済み切手やテレホンカード外国の紙幣やコイン。
実はこれらの品々、コレクターの皆さんなどに買い取って
いただくことで、活動の資金へと生まれ変わります。
ご自宅の引き出しなどに眠っているものがあったら、
ぜひ活動のためにお送りください!

🔍 JVC モノを集めて送る 🔍 で検索
<https://ngo-jvc.info/collect>

送付先 JVC東京事務所

〒110-8605 東京都台東区上野5-22-1 東鈴ビル4F
JVC 物品支援 係 03-3834-2388

※送料の負担にご協力ください

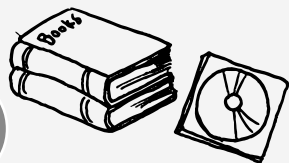
不用品を業者さんに買い取っていただき、
その分をJVCに寄付する支援もあります。

送付先はJVC事務所ではなく、各業者さんになります。それぞれ異なるため、ウェブをご覧
いただくか、JVCまでお問い合わせください。

本・コミック
CD・DVDなど

ブックオフの買取寄付サービス

📖📀 **キモ子と。**

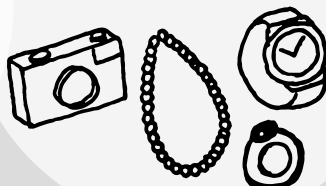


お申込は
ウェブのみ

読まなくなった本、聴かなくなった
CDや使わないDVD・ゲームを箱
に詰めて、無料の集荷を申し込ん
で送るだけ。

アクセサリ
貴金属類

📷📷📷 **お宝エイド**®
家に眠る「お宝」でNPOに寄付できるプログラム



壊れてしまったアクセサリ、使わ
ないカメラなど、ご自宅に眠る不
用品の査定額が寄付になります。
梱包後、集荷を依頼して着払いで
送るだけ。

洋服・カバン・靴など

**BRAND
PLEDGE**

お申込は
ウェブのみ



洋服やバッグ、ハンカチ、靴など、使
わなくなったファッション小物を寄付
できます。取扱いブランドは7,000件
以上。一流ブランドだけではなくカ
ジュアルなブランドも買取可能です。



JVCコリア事業でコロナ後初の対面イベントとなった今回のオープンセミナー

7/17(日) 東アジア大学生ピースフォーラム2022 オープンセミナー

安田菜津紀さん講演会「父はなぜ、ルーツを隠したのか？ 家族の軌跡を巡る旅から見えてきたこと」

物品支援・広報インターン 堀谷 加佳留

はじめに、ご自身が撮影されたシリアやウクライナなどの最近の紛争の写真をスクリーンに映し出しながら、既存のメディア組織にとらわれないフリーのフォトジャーナリストとしてのお仕事について、ご説明をいただきました。

安田さんは、高校2年生の時にNPO法人「国境なき子どもたち」のレポーターとしてカンボジアを訪れ、そこで人身売買をされた子どもたちと過ごされました。個々の当事者と出会うことで「あなたと私」のミクロな関係が生まれ、「この子たちのため自分に何ができるのだろうか?」と考えるようになったそうです。そこに、マクロな視野で国や政治への批判を行いつつも、同時にミクロな個人の痛み・苦しみに眼を向け続ける、今にも続く安田さんの取材・発信姿勢の原点を感じました。

名古屋入管で昨年起きた、本来必要な治療が受けられず命を落としたスリランカ人ウィシュマさんの事件については、国家が「外国人」を治安維持目的で管理・監視するために作り上げた入管制度システムという大きな構造にこそ問題があるのだとの指摘をされました。元々その入管法の矛先には、いわゆる在日コリアンや、その他のアジアにルーツのある人々がいたと、次第にご自身の韓国ルーツをたどる物語に。

パスポート作成手続きで戸籍を見て初めて、亡くなったお父さんが韓国籍だった(ご出身は京都)と知ったものの、当時からネット上に溢れていた在日コリアンへのヘイト言説を目にし、出自について周囲に打ち明けることには後ろめたさを抱えていた安田さん。お父さんが3歳年上のお兄さんには常に敬語でよそよそしい態度だったことに違和感を覚えていたといいます。調べてみると、お兄さんが生まれた当時は

国籍法改正前で、お父さんが認知をすると必然的にお兄さんも韓国籍となり、在日コリアンとして自分が受けてきたような差別的な待遇を受ける可能性があったそうなのです(外国人登録制度管理下にあったお父さんは、数年ごとに役所に指紋や顔写真の提出が求められたそうです)。そんなことから、お父さんの振る舞いには、お兄さんが自分で国籍を選んだ時にづらい思いをしないようにという思いやりがあったのではないかと思いついたそうです。

川崎市内のヘイトクライムに対し弁護士と共に裁判を起こすなど、膨大な時間・労力を費やし、差別に対して確固たる姿勢で臨み続ける安田さんの姿は、理不尽な萎縮や不自由を強いられる多くのマイノリティ・ルーツの人々を勇気づけているはず。一方で、問題の深刻さに比してメディアの関心が低いこと、政治や具体的な政策の動きの鈍さ(鈍感さ以前の軽視ないし明らかな排除の意図を感じるもの)も指摘され、私たちも普段から声を上げる努力が求められることを痛感しました。

質疑応答の時間には、やはり自身も韓国系ルーツがあるという学生さん、社会人の方々からも多くの質問がありました。韓国にルーツを持つ人々が(もちろん、その他の日本社会のマイノリティとされるアイデンティティを持つ人たちも)安心して生きることのできる社会づくりのバトンを引き継ぐのは私たちです。南北コリアとの交流事業を行うJVCはじめとするNGO、安田さんの主催されるD4Pなど、差別問題を扱う独立系メディアとも繋がって、偏見が少しでもなくなるような情報発信や対話の機会を見出していきたいと思えます。

その他の主なイベント

4/28(木) オンライン開催
月刊JVC#6
「忘れられた戦争、イエメンの今を訪ねて」
新規支援の可能性を見据えた調査に入った伊藤と今中が、長引く戦争下のイエメンの「いま」を語りました。

5/14(土) オンライン開催
JVCオンライン連続セミナー#1
「国際協力とは何か?」
新企画の第1回。国際協力とは何か? 学生や社会人向けの入門講座を木村が担当しました。

5/15(日) 8/21(日) オンライン企画
壁で分断された国をめぐる考える、パレスチナ・ピーススタディーツアー(第8,9弾)

5/19(木) オンライン開催
月刊JVC#7「私たちの記憶、彼らの現実～ガザ空爆から1年」
エルサレムやガザの状況、パレスチナの人たちの生活や気持ちの変化を、木村(万)と大澤が伝えました。

5/28(土) オンライン開催
JVCオンライン連続セミナー#2「中の人伝える魅力やジレンマ～NGOを大解剖」
パレスチナなど現地での駐在や広報担当を経験した並木が(NGOの全体像)を伝えました。

①6/1(水) ②8/1(月) 東京・総理官邸前
#ミャンマー国軍の資金源を断て
①土地の賃料が国軍に?! 日本政府はYコンプレックス支援の即中止を
②日本政府はミャンマー国軍とお友達のままでいいか?

6/30(木) オンライン開催
月刊JVC#8 「南スーダン、洪水と虐殺から逃れて～「世界でいちばん新しい国」の現実」
今井と橋口が緊急支援の呼びかけを行いました。

7/13(日) オンライン開催
月刊JVC#9「ウクライナ戦争の即時停戦を～国連事務総長あての書簡」
日本と韓国の市民・研究者が事務総長に共同で提出した書簡について、岡本厚さんをゲストに語り合いました。

7/30(土) オンライン開催
JVCオンライン連続セミナー#3
「《現地駐在員が伝える》パレスチナ問題×ジェンダー」
イスラエルによる占領と密接な関連のあるパレスチナのジェンダー問題について、大澤が伝えました。

8/17(水) オンライン開催
南スーダン 報じられない人道危機
未曾有の大洪水と武力衝突、10万人にせまる国内避難民の発生。人道危機の背景と支援活動について今井と橋口が登壇しました。

8/18(木) オンライン開催
月刊JVC#10「ジブチ 大国の基地を抱える難民の中継地」
イエメン難民支援の可能性を探る調査に際して訪れたジブチでの見聞を伊藤と今中が語りました。

9/28(水) JVC東京事務所
プランテーション、森林伐採、ダム開発…
今ラオスのセコン県で起こっていることは問題とJVCの活動について、岩田が報告しました。



ずっと思いをはせて
描いてきた

イラストで協力 かじの倫子



「アジアが好きで、イラストを描ける人を探している」と友人に声をかけられ、それまで国際協力の興味はあっても一歩を踏み出せずにいた私がJVCラオスチームを訪れたのは、1990年のことでした。
水曜夜7時。人でこった返す事務所の片隅。年代も職業もバラバラなボランティアたち。

「乳幼児死亡率が高いから、そこに注目してもらおうよ」「まず水だよ。井戸掘りの支援。そして母子保健も」

この時『春・子どもの記念日寄金』が始まろうとしていました。わが子の成長に感謝することもにラオスの子どもの命も守りませんか、というキャンペーン。チラシや返礼の冊子などでイラストの出番があるようです。

ほぼ毎週のミーティングは、白熱する時もあるゆるい時もあり、皆が対等に意見を出し合い、認め合い、そこに心地よさを感じました。皆が共有するのは「募金してもらおうだけじゃない。これからも、ラオスに思いをはせて欲しい」といって、支援者に向け



ひとりごと
あ～なかなかなかない～

イラスト かじの倫子

「ちよつと手伝ってくれない？」と声をかけられ、今度は会報誌担当のスタッフになりました。内容のメインはもちろん活動報告ですが、それを担う「人々」の魅力をもっと伝えたい、と思いつながりま

転居のため離職してから、本格的に「イラストで協力」がスタートしました。描く対象国や活動内容もグッと増えました。行ったことのない国は特に慎重に、衣食住などに嘘がないよう、細部まで資料を見たりスタッフに確認してもらおうとあります。

どんな人々だろう、どんな暮らしだろう、何を伝えられるだろう…。描くときはいつも、思いをはせながら。

おすすめ本

『デジタル・ファシズム
日本の資産と主権が消える』

堤未果 著 / NHK出版新書

2021年8月30日 8800円(税抜)

スーダン現地駐在員 橋口 佑太



さまざまな理由から少子高齢化、地方の過疎化、経済停滞など問題を棚上げし続けてきた日本も、いよいよもう平時は戻らないということ痛感する年となりました。冷戦後の国際秩序が崩壊したことを受けて、圧倒的な不確実性が支配する昭和10年代のような時代に突入したと私も覚悟しています。

本書はそんな今日において、目まぐるしく進歩したデジタル技術がどう全体主義や新自由主義と結びつき、政治利用されるかを解説しています。

まず1点目は、米中覇権争いの狭間で拙速にデジタル化を推し進めることのリスクです。スピードを優先するあまり、文字通りの無法地帯に外資企業を呼び込んで政府レベルで日米デジタル貿易協定のような代物を押し付けられ、RCEP(地域的な包括的経済連携協定)の締結交渉においても中国に大きく譲歩するなど、一般には報道されない話が多く書かれています。中国資本に対して依然として無防備であることもさることながら、日本の対米経済安全保障という観念の欠如に改めて呆れてしまいました。

次に筆者は、公共の大切さを強調し

ます。公共は非効率だと、電電公社、国鉄、郵政三事業などの民営化に邁進してきた日本は、スマートシティの名の下に自治体運営すら民営化に傾倒しています。社会的弱者を支えるセーフティネットなど、ハゲタカのような外資企業と株主に明け渡してはいけない分野が存在し、またどのような先進的取り組みも、法の整備より導入を急ぐと、先行して利権を押さえた企業や国家に規制が利かなくなると筆者は警鐘を鳴らします。

暴走する独裁者には断固として結束せねばならぬ一方、他国全体をデモナイズして過度な恐怖心を煽る報道には必ず裏があります。私たち国民が学んで、知っていかない限り、魔法の杖デジタルはその演出手段でしかなく、政治の舵取りも正しくは行えません。主権者たる私たちが政府やその取り巻きに欺かれたいためには、既に使われた手法を知り、手の内を読み、抗うしかないということを、本書を読んで改めて意識しました。

お知らせ

「夏の募金」報告 指定寄付/無指定寄付すべてを含みます

2022年「夏の募金」にご協力いただき、ありがとうございました!

6月18日 ~ 9月30日

756件 7,830,597円

南スーダン緊急支援募金

6月20日 ~ 7月31日

50件 2,518,479円

募金集計

募金にご協力ありがとうございます。

JVCの活動は、皆さまの募金によって支えられています。

JVCへの募金は、税制優遇措置を受けることができます。

指 定 先	期 間 3 ~ 8 月
無指定	37,819,163
ラオス	4,577,664
南アフリカ	1,149,800
スーダン/南スーダン	3,318,849
パレスチナ	9,961,949
コリア	190,667
新規調査イエメン	6,510,000
みどり一本募金	213,000
東京管理	66,000
調査研究	44,500
広報	500
アフガニスタン支援	873,000
南スーダン緊急支援	2,518,479
合 計	67,243,571 円

※本表に「季節の募金(夏/冬/春)」も含まれます。※「アフガニスタン支援」は、協力団体である現地NGOのYVOを支援するものです。※今回よりこの募金集計には、これまでの郵便振り込みおよび銀行振込による募金に加え、クレジットカードからのお振込みいただいた分も加えています。

人 事

入 職



後藤 美紀

スーダン・ラオス事業担当 (5月16日付)

小学生の時にマザー・テレサの伝記を読んで国際協力に関心を持ちました。大学卒業後は一般企業と在日イエメン共和国大使館で勤務しながらJVCの英語ボランティアに参加し、5月に入職しました。座右の銘は「百聞は一見にしかず」で、何事も実際に見てみないと気が済まない性格です。

異 動

岩田 健一郎

東京担当兼海外事業グループマネージャー
(ラオス事業現地代表より: 7月1日付)

山室 良平

ラオス事業現地代表
(ラオス現地駐在員より: 7月1日付)

産休・育休

仁茂田 芳江

広報担当
(産休・育休より復帰: 4月23日付)

退 職

中原 和江

経理担当 (9月30日付)

新役員からの抱負



岩田 健一郎

海外事業グループマネージャー・ラオス事業担当

この度、理事に就任いたしました、岩田健一郎です。2010年にボランティアとしてJVCに参加し、東日本大震災発災以降はスタッフとして気仙沼で7年間、また南相馬において1年間、復興支援活動に携わりました。気仙沼事業終了後、JVCラオス事務所に赴任して約4年、農村開発や自然資源管理の活動に取り組み、現在に至ります。長い駐在期間を通じて、現地の人びとの声に耳を傾け、目標に向かって協働することを何よりも大切にしてきました。そして、現地の人びとの力が最大限発揮されるように活動することの重要性と難しさを、身をもって学んできました。JVCが国内外を問わず、「現場」に立ちながら声をあげ、行動する団体として力強く歩んでいけるよう、これまでの経験をいかしてよりよい組織を形づくっていきたくと思います。そのためには会員の皆さんと力をあわせていくことが欠かせません。今後ともお力添えをお願い申し上げます。



中山 雅之

国士舘大学大学院グローバルアジア研究科教授

イノベーションと戦略構築の教育を専門としています。NGOとは2005年のJANIC次世代リーダー研修から関わり、外務省NGO研究会・外部有識者委員、JICA・NGO組織基盤強化経営アドバイザー、JANIC理事などを務めさせていただきました。

現在は、NPOパルシック理事、(公社)シャンティ国際ボランティア会監事、Panasonicサポートファンドの海外助成審査委員長などの役目もいただきながら、NGOの活動と財務を調査研究しています。日本のNGOの草創期から現在までのデータを眺めていますと、まだまだやるべきことがあると、つくづく感じさせられます。

JVCとの最初の出会いは、2008年のシンポジウム「アジアの教育現場と国際協力」で、星野昌子さんにご登壇いただいた時でした。非力ですが、当時の御礼を少しでもできればと思っています。

編集後記

7月13日、JVCのボランティアとして、25年以上の長きにわたって活動してこられた近藤裕之さんが亡くなった。寄付された古切手やテレカを一つひとつ整理して活動費に積み立てていく姿は、まったくにして無私、孤高そのものであった。よくスタッフに差し入れをしてくれた。不実な言動や行いには、率直な苦言を呈して下さることもあった。現場にも足を運び、人と交わる。私にとっては市民による活動の原点のような人でもあった。突然の訃報にことばもない。心よりご冥福をお祈り致します。(き)



壁掛けカレンダー 1,600円(税込)



卓上カレンダー 1,300円(税込)

カレンダーなどの収益はJVCの活動を通して人々の暮らしを守る力となります。

JVC国際協力カレンダー2022

くわしくは
同封されている
カレンダーチラシを
ご覧ください。

スマイル年賀状

活動地の子どもたちが
描いたイラストです。

500円(税込)



①パレスチナ



②パレスチナ



③南アフリカ



④南アフリカ



⑤スーダン



⑥宛名面

①～⑤は同じ絵柄が10枚ずつ入ったセットです。⑥は5種類の絵柄が各2枚ずつ、計10枚入ったセットです。

Yahoo!ショッピング(インターネット)でのご購入がオススメです。 **送料100円OFF**



ご購入はこちらから
JVC国際協力カレンダーウェブサイト
<http://ngo-jvc.info/yahoo-shop>

上記のQRコードをスマートフォンなどで読み取るとウェブサイト
に移動します。または、ブラウザ(Edge, Chrome, Firefoxなど)
に上記のアドレスを直接打ち込んでください。JVCのホーム
ページからもとれます。



特定非営利活動法人
日本国際ボランティアセンター

日本国際ボランティアセンター(Japan International Volunteer Center)は、1980年2月、タイのバンコクで誕生した市民による国際協力団体です。JVCの活動目的は、国際社会のなかで、社会的、精神的、物理的に困難な立場を強いられているアジアやアフリカ・中東の人びとに協力すると同時に、地球環境を守る新しい生き方と人間関係をつくり出そうということにあります。そのため私たちは、自らの意志でJVCに参加し、活動を続けてきました。JVCはボランティアという言葉を、「自発的意志をもって、責任ある行動をとる」という意味で団体名として使っています。

JVCでは会員を募集しています。

会員数(10月1日現在)

合計 721名 (正会員:410名 賛助会員:311名)

年会費 (それぞれに正会員と賛助会員があります。)

一般会員: 10,000円 学生会員: 5,000円 団体会員: 30,000円

会員は総会に出席し、JVCの方針などを決定するほか、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・学習会などへ参加することができます。会員の方にはこの会報誌を年3回と、年次報告書をお届けします。入会のお申し込みや会員の方の住所変更などは、会員担当の横山まで。

メールアドレス yokoyama@ngo-jvc.net